語学教育研究論叢第 24 号

日本語の感謝表現と共に用いられるフィラーについて
―自由記述式談話完成テストの回答分析から―

中村　香代子

On the fillers used with thanking expressions in Japanese: The analyses of the responses to an open discourse completion test

NAKAMURA Kayoko

要旨

This paper examines whether any particular types of fillers are used in Japanese thanking situations by focusing on native Japanese speakers' responses to an open discourse completion test. The results of the questionnaire clearly revealed that certain types of fillers were more likely to occur with thanking expressions than were others; they can be further classified according to their functions such as showing hesitation about receiving a favor or unexpectedness of the offer. It was also suggested that the varieties of fillers used could be limited by the status of the hearer and that some situations induced more fillers than did others. While fillers are a unique characteristic of spoken languages, the study results seem to indicate the speakers' patterned and strategic uses of fillers.

This study also investigated the interlanguage pragmatics of German learners of Japanese. Contrary to the expectation that they would not use fillers as often as the native Japanese, the results provided evidence of the learners' high awareness of the use of fillers in Japanese.

1．はじめに

語用論の分野では依頼・謝罪・抗議・感謝など様々な発話行為が盛んに研究されてきた。その分析法は個々の発話行為表現のストラテジー選択やポライトネスレベルなど談話の部分的解析から、発話全体のつながりの中でその果たす役割や意味の重みを捉えようとする談話分析研究へと移り変わってきたが、そうした談話分析の中でも普段注目されることの少ない「フィラー」に今回は焦点を当ててみたい。というのも筆記媒体である談話完成テストを用いて筆者の行った感謝表現についての日本語の研究結果に、通常話し言葉の特徴とされるフィラーがかなりの量用いられており、その種類や出現位置に偶然とは思えない規則性があることに興味をそそられたためである。実際の被験者データを基に厚意に対する感謝という発話行為表現と共に多用されたフィラーの種類や機能を考察してみたい。

2．談話中のフィラーに関する先行研究

2.1　フィラーの定義と機能

「フィラー」と一口にいっても日本語の研究においては研究者によりその命名や対象範囲、また機能説明や品詞分類はさまざまである。場合によってはあいづちとの境界が曖昧なフィラーだが、片桐・杉藤・永野－マドセン（2001）はあいづちは「はい」「うん」「ええ」などの表現で、話し手の発話に対して聞き手の側から合いの手を入れる発話であり、質問や依頼に対する返答としての発話は相手の発話を受けてはいるがあいづちに含まれないとしており、メイナード（1987)も「『あいづち』とは話し手が発話権を行使している間に聞き手が送る短い表現で、短い表現のうち話し手が順番をゆずったとみなされる反応を示したものはあいづちとはしない。」(p.89)と定義している。よって本稿も同じ表現が用いられた場合でも聞き手としての発話はあいづちとし、発話権を得た話し手の発話に現れたもののみをフィラーとして考察の対象とする。名称についても以下に述べるように多様な命名があるが、「フィラー」という呼称は意味や機能を限定的に表さずにすむこと、また 1990 年代の研究でこの名称の使用

頻度が高い（山根 2002)ことから本稿でもこの名称を使用することとした。

フィラーの定義や捉え方は人それぞれである。古いところでは伊佐早(1953)が内容の伝達には直接関与しない終助詞・間投助詞・感動詞・接続詞・副詞の存在に着目してこれらを「遊び言葉」と名づけた上で、「何とかまがりなりにもコトバをつないでいこうとする意欲の現れ」(p.54)とし、これらが相手の注意をひきとめておく場ふさぎ的に用いられた結果、次のコトバの前触れないし強調になる場合があると述べた。さらに「これらの不整表現は話し言葉にあっては無理からぬ存在であるという消極的な面からばかりでなく、積極的に必要な存在であるという面からも時には見られないであろうか」(p.55)とすでにその積極的機能の可能性も示唆している。また小出（1983)は「アー」「エー」「アノー」「ソノー」「何て言いますか」、反復など「知的な命題を構成するものではなく、話すことへの態度を示すもの」(p.83)を「言いよどみ」と命名し、これらは意味の切れ目や文の構造上の境界とは無関係に現れ、意図的に用いられるのではなく、内容の明晰さや場への適切さを保とうと努力する結果無意識に使われるものであると説明している。さらにその役割として次の2点を挙げている。

(1)話の速度を下げ、全体として話の丁寧度を増加させる（例：口ごもる方が心がこもって聞こえる）

(2)やりとりを和らげる働きを持つ（例：すぐに答え始めてぶっきら棒な印象を与えることを避けるために文頭に「そうですねぇ」と言う）

同様にMaynard (1989)も“fillers”を明確な命題的意味を持たない広範囲の発言と定義し、使用動機の点から言語表出がスムーズに行かない場合に用いられる fillers (language-production-based fillers)と対人関係のために用いられる fillers (socially motivated fillers)の2つに分類している。そして後者は沈黙を埋めたり、話の継続を示唆したりする他に、話し手の躊躇や不確実な心情を示すことで発話を和らげる作用があると述べている。つまり fillers や終助詞の多用によりメッセージを包み隠したりやんわりと伝えたりすることで聞き手との関係を極力良好に保とうとする努力の助けとなるとしている。

定延・田窪（1995)は「ええと」「あのー」などを感動詞と分類し、発言権維

持のための間つなぎ機能というよりもむしろ話し手の「ただ今検索演算中」という心的操作を表示する役割を担うものであるとした。さらに田窪・金水(1997)は日本語処理では通常無意識に発せられる雑音として無視される口頭語の「ああ・あの・ま・ええと」などは実はある種の子音母音の組み合わせからなるメタ形態として存在し、特定の心的処理状態に対応していると述べて、より広範囲の感動詞について以下に抜粋したような分類と機能説明を試みている(p.267-8)[1]。

意外・驚き２：あれ、あら、おや・・・(眼前の状況をまず事実として登録し、その情報が事前に用意された知識データと整合しないことを示す標識)

意外・驚き３：おお、わあ、おっ、わっ・・・(眼前の状況や相手の発話から得られた新規情報を登録した上で、その情報が予測を越えるものであったことを表明する標識) 例：「おおぅ、寒い」「わあ、ありがとう」

発見・思い出し：あ、あっ、はっ・・・(自分で発見した情報を新規に登録する際の標識)

嘆息：ああ、おお・・・(ほとんど生理的発生で、主題を伴う感情・評価の形容詞を導ける標識)

これらの感動詞は「恣意性を持つ言語記号と生理的発生の中間に位置」(p.262)し、またこれらが全く無意味でない証拠にそれぞれの音形式の使用には多くの制約があって自由に交換できないと述べ、これらとそれに続く発話には形式・内容の両面で深い関連性があるのではないかという可能性を提案している。

この他にも言いよどみ現象を反復、言いなおし、有声休止 (filled pauses)、無声休止 (silent pauses)に分類し、フィラーを「有声休止」(「アー」とか「エー」とか無意味な音声が発せられる停滞) と捉える田中 (1993)の研究や、フィラーを談話の管理に関する標識として機能する「談話標識」とするメイナード

(1997)の研究など数多くあるが、山根（2002)は以上の研究の成果を集約しつつ、講演の談話・留守番電話の談話・対話・電話の談話の分析を通してフィラーの機能を以下の３つにまとめている。

(1)「話し手の情報処理能力を表出する機能」……軽く発話の調子を整えたり、次の言葉を発するまでの時間を稼いだりするために用いられ、話し手の話し癖や情報処理能力に左右される話し手本人のみにとっての機能

(2)「テクスト構成に関わる機能」……発話の切れ目や発話構造の特別な位置（倒置、助詞の省略、換言・修正、引用や挿入、例提示など）を示し、話し手・聞き手双方の話し（聞き）やすさを補助する機能で、書き言葉でいう区切り符号が現れる場所と大体一致して出現し、出現位置によって種類が限定されることがある

(3)「対人関係に関わる機能」……話し手の納得や心情の高まりなどを表す話し手本位のフィラーや、聞き手に配慮してその負担を和らげるための聞き手本位のフィラー、また応答の冒頭に出現する沈黙回避や発話権譲渡を示すための話し手・聞き手双方に存在意義のあるフィラーがある。

山根はフィラーの各種類には独自の役割があるため互換性がない場合もあること、フィラーが心情の伝達や理解補助など話し手・聞き手双方に有益な「一種の親切信号」(p.237)となって円滑なコミュニケーションを支えていることなどを主張している。以上見たように研究が進むにつれ、始めは全く無意味と思われていたフィラーも談話に影響する様々な機能を持つ存在として認識されるようになった。

２.２　限定コンテクストにおけるフィラー研究

しかしここでふと疑問に思うのはコンテクストから取り出した個々のフィラーに一般的な役割や機能説明を加えて分類することが果たしてどの程度可能であるかということである。例えば先述の田窪・金水の試みは自ら認めている通り分類がかなり大まかで機能説明も一義的である。一方、山根の研究は４つの談話の分野それぞれに出現しやすいフィラーの種類や出現位置を割り出し、

例を挙げながらフィラーの役割を解説しており、分野ごとの使用特徴をかなり体系的にまとめてはいるが、各分野内でのコンテクストの種類は非常に広範で、一つ一つのフィラーが異なるコンテクストでもある程度共通の役割を持つという仮定を前提としている。しかし Saft (1998)はテレビの政治討論や医者・患者、家族の団欒における「いや」の機能を応答・反論・訂正・発話権確保の 4 つに分類した結果、その機能の境界は曖昧で分類は困難であることを認めつつも「いや」がコンテクストによっては別の役割を持ちうることを指摘している。例えば謙遜の意味を込めた曖昧な否定を表したり（例：「いや、それほどでもないですよ」）、対象となる状況が通常の予測を上回り話し手が圧倒されているニュアンスを表したりする（例：「いや、とにかくすごい人だかりでした」）（田窪・金水 1997）。西阪（1999)もフィラーの分析はあくまでも会話のなかで行われるべきで、個々のフィラーの持つ様々な用法全てに共通の特性などはなく、その用法の数も決めることはできないことから用法に関する一般的な定式や系統的分類を試みることは可能とはいいがたいとしている。以上の点から今後のフィラーの使用傾向分析の可能性として特定の発話行為や聞き手との関係にコンテクストを絞った研究が有効なのではないかと考える。従来の研究のように収集した様々なコンテクストのデータの中から目的とするフィラーや頻出するフィラーを取り出してその機能を分析するのではなく、かなり限定したコンテクストの談話に現れたフィラーの種類を見ることで田窪・金水（1997)が示唆したような「フィラーと後続発話表現との関連」を見出すことが可能になるのではないだろうか。

3．日本語母語話者が感謝表現と共に用いたフィラーの分析

3.1　調査方法

先に述べた提案の例として日本語とドイツ語の母語話者およびドイツ人日本語学習者の感謝表現選択の調査を目的に行った自由記述式談話完成テスト（以下 DCT とする）の回答に使用されたフィラーについて考察してみたい。そもそもフィラーは話し言葉に特徴的な現象である（山根 2002）。談話完成テス

トの回答は現実の会話よりも短くなる傾向があり(Olshtain & Cohen, 1983)、とっさの反応よりも準備ができるため(Hinkel, 1997)、実際の応答では使用されるフィラーの数はもっと多く、位置も文頭だけでなく文中のあちこちに出現すると思われ、使用されるフィラーの全体像をつかむには自然会話の分析が不可欠であろう。しかし十分に時間をかけられる筆記回答にしいて使用されたフィラーは欠くことの出来ない何らかの意図的役割を果たしていると考えられる。また筆記テストでは韻律や仕草が分からないため(Eisenstein & Bodman, 1986)、フィラーの正確な分析は音声データがある場合より困難であると思われるが、今回の回答を見ると実際にフィラーを使用する際の音律を出来るだけ正確に表現するため「うわぁ」「あ…」「えっ！」「え～？」「えっっ、あ…」など被験者の表記に様々な工夫が見られ、このことは話し手（ここでは書き手）が意識的にフィラーを使い分けている可能性を示唆しているものと思われる。よってあえて筆記テストである DCT の回答に使用されたフィラーを分析することにより話し手が対人的方略として意図的に感謝表現と共に使用するフィラーの特徴分析を試みた。

本稿で分析する日本語回答を提供してくれた被験者は日独の大学生・大学院生からなる次の３つのグループである（表 1)。

表１　被験者グループ

	日本語母語話者	JFL 日本滞在歴が(殆ど)無いドイツ人日本語学習者	JSL 日本滞在歴１年以上のドイツ人日本語学習者
男性	32	11	25
女性	30	23	19
合計	62	34	44

DCT には被験者が厚意を受ける 12 の感謝場面を設定し、その中でとっさに何と受け答えすると思うかを尋ねた。これらの場面は異なる場面要素（社会的距

離、相手との力関係、相手にかける負担の大小）の組み合わせを反映している（表 2）。

表 2　12 の場面設定の内容とその表す場面要素の種類・程度

親疎/関係		重い負担	軽い負担
親	話し手より下	(1)後輩が車で家まで送ってくれる	(2)家庭教師をしている小学生がコーヒーを運んできてくれる
	同　じ	(3)ルームメイトが立替で荷物を受け取ってくれる	(4)テスト前にクラスメートに頼んで講義のノートを借りる
	話し手より上	(5)担当教授に頼んで推薦状を書いてもらう	(6)課長がコーヒーをおごってくれる
疎	話し手より下	(7)駅で高校生が荷物を一緒に運んでくれる	(8)中学生が電車で席を譲ってくれる
	同　じ	(9)知らない学生がコピー機を直してくれる	(10)知らない学生が教室で友達の隣の席とかわってくれる
	話し手より上	(11)タイヤチェーンが巻けずに困っていると男性が巻いてくれる	(12)中年男性が電車で席を譲ってくれる

3.2　結果分析

まず日本語母語話者の DCT 回答中にフィラーが用いられた数とその割合をまとめたものが表 3 である。

表 3　日本語母語話者のフィラー使用傾向
（フィラーを含む回答／各設定の回答数）

設定		
1 後輩が車で家まで送ってくれる	13 / 62	21%
2 家庭教師先の小学生がコーヒーを運んできてくれる	29 / 62	47%
3 ルームメイトが立替で荷物を受け取ってくれる	21 / 62	34%
4 テスト前にクラスメートに講義のノートを借りる	4 / 62	7%
5 担当教授に頼んで推薦状を書いてもらう	4 / 62	6%

6 課長がコーヒーをおごってくれる	2 / 62	3%
7 駅で高校生が荷物を一緒に運んでくれる	8 / 62	13%
8 中学生が電車で席を譲ってくれる	30 / 62	48%
9 知らない学生がコピー機を直してくれる	7 / 62	11%
10 知らない学生が教室で席をかわってくれる	30 / 62	48%
11 知らない男性がタイヤチェーンを巻いてくれる	4 / 62	6%
12 中年男性が電車で席を譲ってくれる	8 / 62	13%
全設定の合計	160/744	22%

表 3 からわかるように筆記形式のテストであったにも関わらずかなりの頻度でフィラーが使用されていること、そして設定により使用・不使用に明らかな傾向が見られることから、フィラーが場つなぎのためだけの無意味な音声として無意識に発せられているばかりとはいえず、談話中の対人方略の一部として使用されている可能性が高いと想像できる。表 3 の結果をもう少し詳しく見てみると、回答数自体が少ないため判断は難しいが異なる設定間のフィラーの使用頻度にはかなりの差が現れた。例えば、設定 2、8、10 では半数近くの回答にフィラーが使用されていたのに対し、設定 4、5、6、11 などでは殆ど使用されていない。このことはフィラーが使用される背景にはある一定の条件があることを示しているようである。しかしその理由を探る前に、使用されたフィラーの種類と役割について少し考察してみたい。

3.2.1　使用されたフィラーの種類と役割

回答中に出現した全てのフィラーの種類と設定ごとの使用頻度を以下のようにまとめてみた（表 4)。田窪・金水（1997)も指摘しているように、同じ母音で始まるフィラーでも長音化（ああ、おー）や促音化（あっ、えっ)、音調変化（えっ！、えっ？）によりそれぞれ異なる心的機能を表現すると思われるため、これらは別項目として分類してある。

表４　日本語母語話者の使用したフィラーの種類と設定別頻度

種類＼設定	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	合計
あ	5	10	6		3			18		26		4	72
ああ（あぁ）	3	3	1	1		1	1	3	3		1	1	18
あ…												3	3
あー（あ～）			2					1			1		4
あっ	1							2		1			4
あの					1						1		2
あら		2						1					3
あらー		1											1
ありゃ～									1				1
あれ		1											1
いや	1					1	3						5
いやー（いやあ）							1				1		2
いやいや							2						2
うわ									1				1
うわ(ぁ)ー		1	1						2				4
え			1							3			4
えっ(！)	1		1					1					3
えっ？			1										1
え、あ							1						1
えっっ、あ								1					1
えっ…あぁ～								1					1
お	1	6	1										8
おお（おう）			6					1					7
おー（お～）	1	1	1	2									5
おや		2											2
まあ								1					1
わ		1											1
わあ		1											1
わぁーい				1									1
合　計	13	29	21	4	4	2	8	30	7	30	4	8	160

表 4 から使用頻度が高かったフィラーは長音・促音を含む「あ」と「お」のバリエーションであり、「あ」の変化形（表 4 の上の網掛け部分）は全使用フィラーの 63%（101/160）、「お」の変化形（下の網掛け部分）は 13%（20/160）で、合わせて全体の 3/4 以上を占めるこれらが感謝表現と共起しやすいフィラーといえそうである [2)]。更に詳しく見てみるとその中でも「あ」の使用が圧倒的に多く、次に「ああ」もよく使われていることがわかる。実際の使用例を見ると、「あ、ありがとう」「あ、すみません」「あ、どうも」「ああ、ありがとう」「ああ、ごめんねー」など直接的な感謝・詫び表現の前に現れる場合が殆どであるが、その他にも「あ、いいんですか」や「あ、そうなんだ」「あ、じゃあ失礼します」など相手の意思の確認や申し出を受ける表現の前にも現れた。「あ」の代表的機能として「気付き」（山根 2002）、「発見」（田窪・金水 1997）などが挙げられるが、この場合の「あ」「ああ」は相手の申し出に気付いた標識というよりは、相手の厚意を認識すると同時にそれを受け入れて甘えることへの一瞬の戸惑いを表すものと考えられる。これらのフィラー無しに「ありがとう」「じゃあ失礼します」などとそのまま応じた場合は厚意を当然のことと受け止めたような傲慢なニュアンスになる可能性もあるが、これらのフィラーはこうしたニュアンスを緩和する役割を果たしており、山根の言う「期待表明や感謝に対する一種の謙遜を表」す「ア」（p.144）に類似するものである。「あ…」はさらに長い戸惑いを表しており、中年男性に席を譲られる場面で「あ…はい。お心遣い有難うございます。ではありがたく。」「あ…すみません。ありがとうございます。」のように使用されている。「お」「おお（おう）」もこれらと同様の役割を持つと考えられるが、「あ」「ああ」に比べ分布が目下や同輩に限られている。また「お」「おお」「おー」は山根、田窪・金水も指摘している通り、男性の使用が圧倒的に多かった（男性の使用が計 20 回中 17 回）。また「あー（あ～）」「おー（お～）」は予測を越える状況に対する感動を表し、その後に続く表現を強める働きを持つようである。実際の使用例を見ても、「あー、ありがと、ありがと。」のように繰り返したり、「お～、ありがとう！」のように強調した口調が続いたりすることが多く、ほぼ目下か同輩のみに使用されている。

しかし「ああ」「おお」なども感動を表す場合もあると思われ、その境界は曖昧である[3)]。また「わあ」も「わあ、ありがとう。ステキな香りね！」のように用いられて感動を表し、さらに強い喜びを示す「わぁーい」を使った回答も見られた。

他にも「あっ」「えっ」「あら」「おや」「まあ」「わ」など相手の申し出に対する驚きや意外性を表すと思われるフィラーも多く用いられた。これらをさらに詳しく見て行くと、①「あっ、ありがとう」などただ単に不意を突かれた驚きを示すもの、②「あら、気が利くのね。ありがとう」「おや、今日はどうしたの？とても気が利いてるじゃない」「まあ、すみません」などのように事前に厚意を期待していなかったという謙虚さを表すもの、③「わ、ありがとう。でもそんなに気を遣わないでね」のように相手の厚意が自分が常識的に甘えてもよいとするレベルを越えるものであることを示すものなどに分類できそうである。②の強意バリエーションとして「あらー」「ありゃ～」、③には「うわ」「うわー（ぁ）」などが見られた。これらは「うわ、ごめんなさい。ほんっとごめんなさい」「うわー、ほんっとう～にありがとうございました」のように他の強意表現と共に用いられ、強い恐縮の表現を助長する役割を果たす。さらに「え、あ、ありがとう」「えっっ、あ、ありがとう」「えっ…あぁ～ありがとう」のようにフィラーを連続して用いることで驚き＋戸惑い＋遠慮など、より複雑な心的態度を表明する例も見られた。

以上の結果から厚意に対する感謝場面というかなり限定されたコンテクストの中でも様々なフィラーが用いられていること、しかし分析を進めると使用されるフィラーに偶然とは思えぬ高い共通性が見られること、そしてそれらは戸惑い、感動、驚きなど限定された種類の役割に大別できることがわかる。

3.2.2　場面設定とフィラーの使用頻度

次に個々の設定とフィラーの使用頻度の関連を考えてみたい。まずフィラーが殆ど使用されなかった設定 4（クラスメートに頼んで講義のノートを借りる）や設定 5（担当教授に頼んで推薦状を書いてもらう）については聞き手の

自発的厚意ではなく話し手自らの依頼に対する承諾であり、戸惑いや驚きのフィラーを使用することは不自然なためと考えられる。また設定 6（課長がコーヒーをおごってくれる）や設定 7（駅で高校生が荷物を一緒に運んでくれる）、設定 9（知らない学生がコピー機を直してくれる）、設定 11（男性がタイヤチェーンを巻いてくれる）については聞き手が勘定を払ったり、作業をしたりする間に発話を準備する十分な時間的余裕があり、戸惑いや驚きを表すのは場にそぐわないためであろう。実際、これらの設定で使用された数少ないフィラーは「お～、ありがとう！」「わぁーい、ありがとう」「あぁ、何だかごめんなさい」「あ～、親切な人に出会えて良かった！」など感動を表明するものが殆どであった。これに対し、回答にフィラーが頻出した設定 2（小学生がコーヒーを運んできてくれる）、設定 8（中学生が電車で席を譲ってくれる）、設定 10（知らない学生が席をかわってくれる）では申し出られた厚意に対し事前の準備なくとっさの反応が求められるため、戸惑いや驚きを表すフィラーが大変多く使用されている。設定 3（ルームメイトが立替で荷物を受け取ってくれる）も帰宅して世話になった事実を告げられた瞬間のリアクションが求められるため、同様のフィラー使用が多い。このように感謝場面におけるフィラーの使用頻度は聞き手との関係や相手にかける負担の大小よりも、むしろ感謝を必要とする事態が発生してから感謝を表明するまでの時間的余裕に左右されるようである。

次に聞き手との関係とフィラーの種類を見てみると、設定 2 の目下で親しい小学生に対しては「あ」の他に「お」「お～」なども多く用いられ、驚きのフィラーも「うわ～」「あらー」「わあ」など割と自由に発せられているが、設定 8 の初対面の中学生には「あ」「ああ」への偏りが強くなり、設定 10 の初対面の学生に対しては殆どが「あ」のみであった。また設定内容の違いによる影響もあるが、全般的に相手が目下か同輩の場合は使用フィラーの種類が豊富であり、特に親しい相手にその傾向が強かった。これに対し目上の場合は親疎に関わらず使用されたのはほぼ「あ」「ああ」のみであった。このようにフィラーの種類は聞き手との関係にもある程度の制約を受けるらしいことがわかった。

4．ドイツ人日本語学習者が感謝表現と共に用いたフィラーの分析

4.1　ＪＳＬグループのフィラー使用

次にドイツ人日本語学習者の DCT 回答におけるフィラー使用についても考察してみたい。まず第二言語としての日本語学習者(JSL)の回答に現れたフィラーの分析を先程と同様に試みたところ、設定別のフィラーの使用頻度に日本語母語話者と共通する傾向が見られた。設定 2、3、8、10 にはフィラー使用が多く、設定 5、6、7、9 などは目立って少なくなっている。回答全体でのフィラーの使用割合は日本語母語話者の 19%に比べ 15%と若干少ないが、使用にふさわしい場面選択などかなりよく把握しているといえるのではないだろうか。

表５　JSL のフィラー使用傾向　（フィラーを含む回答／各設定の回答数）

設定		
1 後輩が車で家まで送ってくれる	3 / 44	7%
2 家庭教師先の小学生がコーヒーを運んできてくれる	15 /44	34%
3 ルームメイトが立替で荷物を受け取ってくれる	11 /44	25%
4 テスト前にクラスメートに講義のノートを借りる	5 / 44	11%
5 担当教授に頼んで推薦状を書いてもらう	0 / 44	0%
6 課長がコーヒーをおごってくれる	4 / 44	9%
7 駅で高校生が荷物を一緒に運んでくれる	1 / 44	2%
8 中学生が電車で席を譲ってくれる	13 /44	30%
9 知らない学生がコピー機を直してくれる	2 / 44	5%
10 知らない学生が教室で席をかわってくれる	12 /44	27%
11 知らない男性がタイヤチェーンを巻いてくれる	7 / 44	16%
12 中年男性が電車で席を譲ってくれる	9 / 44	20%
全設定の合計	80/528	15%

さらに JSL グループの被験者が使用したフィラーの種類と設定別出現回数を表 6 にまとめた。被験者数が少ないせいもあるが、全体の種類数は日本語母語話者の 22 種類に比べ、14 種類と少なかった。

表6　JSLの使用したフィラーの種類と設定別頻度

種類＼設定	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	合計
あ	1	6	5	3		2		7	1	4	2	5	35
ああ（あぁ）	2	3	4	2				2		1	1	1	15
あー（あ～）										3			3
あっ		1	1					2		3	1	2	10
あら									1				1
え		1	1				1	1					4
お										1			1
おっ		1						1					2
おお（おう）		2				1					1		4
おー（お～）		1											1
ま						1							1
や												1	1
やー											1		1
わ											1		1
合　計	3	15	11	5	0	4	1	13	2	12	7	9	80

ここでも母語話者と同様「あ」「ああ」が最も多く用いられているが、それに次いで「あっ」というフィラーの使用が多かった。これは日本人のよく用いる「あ」がドイツ人学習者にはこのように聞こえているためかもしれないし、ドイツ語で非常によく使われる感動詞“ach”に類似していて使いやすいのかもしれず、必ずしも驚きや遠慮を示すとは限らないと思われるが、いずれにしても興味深い。全体数が少ないので一概には言えないが、設定2や設定8でフィラーの種類が多いのは母語話者と同じだが、設定6や11など目上の相手にも様々な種

類のフィラーが自由に使われているのは異なる点である。全般的には自然なフィラー使用が多かったが、中には初対面の中年男性に「や、そうしたら、ありがとうございます」や「わ、大変助かりました」などの変わった表現を用いたり、コピー機を苦労して修理してくれた学生に対して「あら、大変な仕事でした」、コーヒーをおごってくれた上司に対して「ま、今度は私がね」など不適切なフィラーを使っている回答もあった。体系的に教科書で学ぶことの無い項目でもあり、日本での滞在経験があってもなかなか習得の難しい言語対象といえよう。

4.2　ＪＦＬグループのフィラー使用

最後に外国語としての日本語学習者(JFL)グループの使用したフィラーについても簡単に触れてみたい。表 7 にまとめたように使用されたフィラーは JSL と同じく全部で 14 種類であったが、回答全体でのフィラー使用割合は 11.5%と JSL よりもさらに少なかった。使用内容を見ると、母語話者や JSL 同様「あ」「ああ」の使用が最も多いが、JSL に比べ日本語力が劣る為か不自然なフィラー使用が多かった。例えば車で送ってくれると申し出た後輩に「まあ、そうですね」や「やあ、ありがとうございます」、コピー機を直してくれた学生に「ね～、ごめんなさい。ありがとうございます！」、また電車で席を譲ってくれた中年男性に「さあ、そうならどうもありがとうございます」などの回答があった。これらは自然に身に付いて発したフィラーというよりは、日本語母語話者がよくフィラーを口にするのを認識した上で、より自然な発話を目指して意識的に使用を試みたものであろう。やはり自然なフィラーの使用法をマスターするのは容易でないことがわかるが、学習者が筆記テストにおいてもここまでフィラーを用いようとしたことは日本語のフィラー使用に対する彼らの意識の高さを示唆していると思われる。

表7　JFLの使用したフィラーの種類と設定別頻度

種類＼設定	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	合計
あ		4	3		1			3		1		2	14
ああ	2	2	4	1	2		1	2	1			1	16
あ…		1									1		2
あっ		1		1									2
あー								1		1			2
あの（あのう）	1							1					2
え										1			1
えっと						1							1
おお（おう）		1	1										2
さあ												1	1
ね～									1				1
へえ			1										1
まあ	1												1
やあ	1												1
合　計	5	9	9	2	3	1	1	7	2	3	1	4	47
34回答内割合	15%	26%	26%	6%	9%	3%	3%	21%	6%	9%	3%	12%	11.5%

5．おわりに

今回はある特定の発話行為や聞き手との関係などを限定したコンテクストの中でフィラー使用の実態を調べ、発話表現とフィラーの関連性を調べることを提案してみた。例として自由記述式談話完成テストにおいて日本語母語話者が感謝場面で用いたフィラーを分析したところ、その種類や設定毎の出現頻度には個人差を越えた共通性が見られ、それらはいくつかの限定された役割に分類できることが示された。また聞き手との関係によりフィラーの種類は限定さ

れる場合があることもわかった。次にドイツ人日本語学習者のフィラー使用についても概観したところ、母語話者と類似した使用傾向が見られたが、その使用種類は少なく、また不自然なフィラー使用もあり、その習得の難しさを窺わせた。

先に述べたようにフィラーはそもそも話し言葉の特徴であるので、(自然会話ではコンテクストの統制は難しいが) 類似する自然会話からのデータやロールプレイのデータなどを収集・分析した上で先の談話完成テストの結果と比較するとまた興味深い結果が得られるかもしれない。しかし今回の回答中に見られたフィラーの発音を正確に表記するための様々な工夫や被験者が共通して見せた使用傾向から、対人方略としてかなりパターン化したフィラーの意識的・選択的使用が示唆された。若者に多く読まれる本や漫画などの媒体によるフィラーの活字化との関連なども今後取り組んでみたい課題である。

さらに他の種類の限定コンテクストで同様の調査を行って比較することも有益と思われる。例えば今回の談話完成テストで同時に行った誉めへの返答の結果には「えー」「いやぁ」など感謝場面とはまた違う数種類のフィラーが頻出していたが、このようにコンテクスト毎に異なるフィラーの使用傾向を得られれば特定の発話行為とフィラーとの関連がさらに明らかになり、教育の場でも少しずつ活かせると思う。今回はテストの性質上殆どが冒頭に現れるフィラーの分析となったが、後続する文中やさらに長い談話の中でどのようなフィラーが使用されてゆくのかについても今後是非研究してみたい。

註

1) 田窪・金水は感動詞と共に以下のような応答詞の分類と解説も試みている。

応答1：ああ、ええ、はあ、はい……

応答2：いいえ、いえ、いいや、いや、いやいや……

しかし「明確な命題的意味を持たない」発言(Maynard 1989)というフィラー本来の定義とははずれるため本稿で扱うフィラーには含めない。ただし「いやぁ、すごい人

だかりで」「いやいや、もうびっくりするような」など応答詞が転用され、「通常の予測を上回っている」(田窪・金水 1997:266)という話し手の感情を表す感動詞的用法については含めることとする。

2）後に日本語母語話者につき 117（男 39/女 78)名の大学生を対象に行った追加調査の結果でも設定間のフィラー使用頻度には同様の偏りが見られ、フィラーの種類でも「あ」と長音化・促音化によるその変化形が 68%（113/167)、「お」の変化形が 8%(13/167)とやはり合計で全体の 3/4 を占め、感謝表現と共に使われやすいフィラーであることが確認された。「お」のバリエーションの割合が相対的に減ったのは男女比率の影響と思われる。

3）音声データの分析においてもフィラーがどのような役割で使用されたかを他者が客観的に区別することは困難である。筆記ではさらに韻律の違いが分からない為分類には限界があるが、本来個々のフィラーはさまざまな用法を持ち得るものであり、数量的な役割分類は不可能であると思われる。ここでは特徴的で分かりやすい主な役割の指摘を試みるに留める。

参考文献

伊佐早敦子（1953)「はなしことば序 －不整表現を中心として－」『国語国文』第 22 巻第 3 号－223 号

片桐恭弘・杉藤美代子・永野－マドセン泰子（2001)「対話におけるあいづちの形式と韻律の機能の分析」『文法と音声』くろしお出版（263-274)

小出慶一（1983)「言いよどみ」水谷修編『講座日本語の表現 3　話しことばの表現』筑摩書房（81-88)

定延利之・田窪行則（1995)「談話における心的操作モニター機構　－心的操作標識『ええと』と『あの（—)』－」『言語研究』第 108 号（74-93)

田窪行則・金水敏（1997)「応答詞・感動詞の談話的機能」『文法と音声』くろしお出版(257-279)

田中敏（1993)「休止の意味論」『月刊言語』第 22 巻第 8 号（20-27)

西阪仰（1999)「会話分析の練習　相互行為の資源としての言いよどみ」好井裕明・山田富秋・

西阪仰編『会話分析への招待』世界思想社（71-100）

メイナード・K・泉子（1987）「日米会話におけるあいづち表現」『月刊言語』第 16 巻 11 号（88-92）

メイナード・K・泉子（1997）『談話分析の可能性 ー理論・方法・日本語の表現性ー』くろしお出版

山根智恵（2002）『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版

Eisenstein, M., & Bodman, J. (1986) 'I very appreciate': Expressions of gratitude by native and non-native speakers of American English. *Applied Linguistics*, 7, pp.167-185.

Hinkel, E. (1997) Appropriateness of advice: DCT and multiple choice data. *Applied Linguistics*, Vol. 18, No.1, pp.1-26.

Maynard, S. (1989) *Japanese conversation*. Norwood, NJ: Ablex.

Olshtain, E., & Cohen, A. (1983). Apology: A speech-act set. In N. Wolfson & E. Judd (Eds.). *Sociolinguistics and second language acquisition* (pp.18-35). Rowley, Mass.: Newbury House.

Saft, S. (1998) Some uses and meanings of utterance: Initial *iya* in Japanese discourse. *Japanese Korean Linguistics*. Vol.7. pp.121-137.